

## 令和5年度第3回社会教育委員会議録

- 日 時 令和6年2月26日（月）  
午後2時から午後4時まで
- 場 所 徳島県庁10階 大会議室
- 出席者 徳島県社会教育委員：12名  
馬場委員長、赤松委員、石倉委員、伊藤委員、榎本委員、  
岸本委員、児嶋委員、小西委員、武市委員、泊委員、  
横田委員、横畠委員  
教育次長、生涯学習課長、生涯学習支援課長、事務局他：6名

### ■会議概要

- 1 開 会
- 2 徳島県教育委員会挨拶（教育次長）
- 3 議事
  - (1) 今期社会教育委員会議提言テーマについて
  - (2) 今後のスケジュールについて
  - (3) その他

#### 議事（1）今期社会教育委員会議提言テーマについて

馬場委員長

議題1について協議をお願いしたい。次世代を担う若者達の育成が社会教育でも非常に重要なキーワードだと思っている。徳島はそういった事業に先駆けて取り組んでいる。ぜひその成果に期待したい。山口県で地域づくりフォーラムというのを毎年開催しており、私も、先日、参加してきたが、非常に勉強になった。フォーラムでは、高校生が地域や社会の課題について、自身で課題を設定し2年間をかけて研究している。県が予算をとって事業を進めているようだ。去年に引き続き、今年も高校生の発表があり、4人ほどの高校生が日頃の研究の成果を発表していた。非常に素晴らしいと思い、感心しながら帰ってきた。若い人に焦点を当て、セミナーを実施するというのは、近年あちこちで実施されている。次世代育成というのが大きな課題なのだと改めて痛感している。

昨年6月に国の第4期教育振興基本計画が閣議決定されたが、その中では、先行き不透明なVUCA（ブーカ）の時代に、持続可能な地域を切り拓いていく若者をどのように育てていくのかということが教育の大きな課題になっている。このような中、高校生達の発表を聞き、非常に力強いと思った。高校生は年に1回、成果発表会を行っているそうだが、高校生たちをファシリテートしているのは教育者ではない。もちろん教育的な視点を持っておられることは言うまでもない。この事業では、成果を突き詰めるようなことはしていない。では、何を重要視するのか。それは、生徒自身の「変容」である。「教育」であ

る以上、プロジェクトに生徒が参加することにより、どのように変わったかという点を重視しているということであった。それを伺って、まさしく「教育」だと改めて思った。若者達は普段、意識しないと思うが、活動を通して多様な人と関わることで、変わっていくという過程が一番大事である。また、先が全く読めない変化が非常に激しい中、さらに生成 AI 等の新しい科学技術とも、どう向き合っていくのかといった課題も出てくると思う。

そういった社会背景を踏まえ、教育振興基本計画では、持続可能な社会、ウェルビーイングの社会をどう作っていくのかが大きな課題として取り上げている。

徳島県でもその事を意識して、我々もこの提言の中に組み込めたら良いと思うので、持続可能な社会をつくるために、子供達をどのように育てていくのか等を視野に入れながら、大人として何が出来るのか、委員の皆様の忌憚のない意見をいただきたい。加えて、日頃の活動の中でお気づきになったことや、社会教育委員としての今後の取組等についても、ぜひ、触れていただきたいと思う。それでは、まず、事務局から資料の説明をお願いしたい。

第2回の会議で皆様から頂いた意見を6つに分類し、整理している。(資料上段左)社会教育施設の環境整備については、地域住民にとって最も身近な社会教育施設である公民館の ICT 環境の整備状況について意見をいただいている。ICT 環境の整備等については過去2回の提言でも、ICT 環境の整備が喫緊の課題であるという事を明記している。更に、コロナ禍を経て社会教育に関する学びがストップしたという非常に厳しい経験からも、ICT 環境の整備の必要性について、市町村においても認識をされていると思う。しかし、住民の生涯学習や発災時等における防災拠点として十分な整備が整っているとは言い難い状況である。このような状況を踏まえ、①ICT 環境の整備は学びや防災拠点という観点からも喫緊の課題である。②必要なハードの整備と良質なソフトの整備は生涯学習推進の両輪である。③コミュニティセンター化が進んでいるエリアについて、地域住民の生涯学習にどのように取り組んでいくのか。公民館機能の停滞等について意見をいただいた。

次に(資料上段右)、社会教育人材の育成と配置については、①子供から高齢の方までの生涯学習をコーディネートする人材の必要性やライフスタイルの変化、住民の学びのニーズに応じていく生涯学習コンテンツの準備に苦労されているといった意見。②社会教育士が地域に増え、地域の方々の学びを推進することについても意見をいただいた。

続いて(資料下段左)、学びと活動の循環については、①県内各所で、人材育成事業が実施されているが、学んだ事をしっかりと実践に移す取り組みが、まだ十分ではないといった意見をいただいている。また、②地域の中に子供達のアイデアが実現する環境、大人達が挑戦する場所や機会の創出が必要である。

更には、③多様な主体とのネットワークの必要性について意見をいただいた。

続いて(資料下段右)、学校・家庭・地域の連携協働については、①学校と地域の連携協働が円滑に進むよう、行政としてのシステム作りを求める意見のほか、②徳島県では令和4年度にコミュニティ・スクール(以下 CS と表記)の設置が大きく前進したが、次のステップとして CS の内容充実はもとより、特色ある学校づくりに CS の充実は不可欠であるとの意見をいただいた。

また、③地域学校協働活動や部活動指導等に関わる人材の地域間格差の解消に取り組む必要について意見をいただいた。

続いて(裏面上段左)、困難を抱える児童生徒等の支援と共生については、困難を抱えるまたはサポートを必要とする方への支援と共生社会の実現について意見をいただいた。特に、多くの意見をいただいたのが、不登校の子供達に対する取組についてである。①不登校の子供達を社会全体で継続して支える仕組み作りと支援者の人的リソースの拡充について意見をいただいた。また、②福祉と教育の連携を通して共生社会に向けての理解を進めることの重要性や発災時の避難所等で、支援を必要とする方への対策が必要であること。更には、③その事を地域の方々が理解する仕組み作りが必要であるといった多角的な意見をいただいている。

また、人材育成や環境整備の仕組み作りに共通する意見として①社会教育に係る活動の PDCA を検討する必要がある。一過性ではなく持続可能な活動となるよう工夫が必要だといった意見や②社会教育に充当する予算が縮小していることへの対策等が必要であるという意見をいただいた。

第2回会議でいただいた意見を6つに分類し整理した。説明は以上である。

馬場委員長

提言に結び付くような骨子を説明いただいた。まず、「社会教育施設の環境整備」ということで、特に住民の身近な学習の場である公民館等の機能の高度化・強化が非常に重要だということ。先の生成 AI ではないが新たな科学技術が生まれる中、学校教育に比べて社会教育の場というのは、環境整備という面でまだまだ課題があると、複数の委員から意見をいただいた。

それから「人づくり」、人材育成が非常に大事であるという点は、骨子案に繋がると考えている。昨年6月の第4次教育振興基本計画の中でも、社会教育施設の ICT 化に関することや人材育成が強く打ち出されている。今、中央教育審議会の生涯学習分科会の中でも、施設の機能充実や社会教育士を含めた社会教育を担う人材を、どのように育成していくのかについてまとめられている。生涯学習分科会の下にある人材部会で話し合われているのが、社会教育士をどうやって増やしていくかということ。間もなく報告書が出るのではないかと思う。社会教育士とは、社会教育主事資格を持つ人のことである。社会教育主事は公務員。法律で教育委員会事務局に置くことになっている。教育委員会事務局に置かれ、社会教育主事として発令されなければ社会教育主事とは言えないが、社会教育主事資格を生かせる範疇は非常に幅広いので、様々なところで役に立つ資格になる。このような観点からも社会教育士を増やしていくことが社会教育の課題だと言われている。そして学校・家庭・地域の連携ということで、CS についても色々と意見を出していただいた。山口県のセミナーでも、

学校・家庭・地域の連携が非常に重要だということで、非常に優れた事例が発表されている。興味深かったのが福岡県飯塚市の事例。放課後児童クラブ(学童)を教育委員会に移して学校教育課が学童を所管している。放課後児童クラブは厚生労働省の所管であるので、本来は首長部局で実施されるものなのだが、学校施設を活用するという非常に面白い取組。しかし、一方では教員の仕事が多忙化する中で、益々、負担が増えるのではないかと思った。ただ、無理強いはしていない。出来る範囲で学習支援をしたり、体験活動をしたりしている。もちろん学童には指導員がいるので、体験活動等は指導員の元で行われているが、放課後児童クラブが学校内にあるので、教員と指導員との間の情報交換が非常にしやすいというメリットを生かした取組が行われているようだ。家庭や地域の問題は指導員の方が詳しい、一方、学校での生活については教員の方が詳しい。両者が手を取り合い、子供達を育てていく、常に子供達を誰かが見守っているという状況をあえて作っているところが素晴らしいと思う。

他の市町村で出来るのかというと、なかなか難しい。学校の教員の協力がないと進まないで、一気に全国的に広まる事例ではないと思うが非常に参考になった事例である。まさにCS そのものだと思う。

また、財源確保についても、なかなか難しいと思うが、ぜひ、提言したことを実現出来るようにしていければと思う。そのためには、我々が申し上げた意見をぜひ実現していただくような財源確保が大事だ。

来年度は、徳島県が社会教育の中国四国地区のブロック大会の担当県であるので11月に大会が開催される。その打ち合わせの会議に出席すると、いつもとある委員の方が、学校教育には多額の予算を投入するが、社会教育には全然投入していないと仰っていた。それは、もっともな意見であるが、次の世代を背負っていく子供達の学びの環境を整えることは重要なことである。予算が無くとも出来ることはあると思う。ネットワークを通じて、横の繋がりを広げていくことで事業の充実が可能になると思うので、そういう視点も加味しながら頑張っていけば、徳島の社会教育も益々良くなるのではないかと思う。

それでは、各委員からの意見をお聞きしたいと思う。

赤松委員

最近にあったことや感じたことから話をさせていただきたい。まずは、2月7日に社会教育委員と社会教育主事の研修会を教育委員会で計画をしていただき参加した。研修では、前回の提言でも紹介されているフリースペース「うみのこてらす」を開設している川邊笑(かわべ えみ)さんのお話をお伺いすることができた。私も不登校の問題について非常に関心を持っており、実際に川邊さんの話を伺い、川邊さん自身の考え方に改めて感心し、感動した。川邊さん自身は、今年、大学を卒業する。教員を目指して教員養成大学に進んだが、教員ではなく、自身で法人を立ち上げ、子供達の居場所づくりに特化した活動を行っていこうとしている。彼女自身も収入を得て生活をしていかなければならない中で、この取組は大きな冒険だと心配もし、応援もしている。私は彼女に、「なぜ、あなたは決して簡単ではない道に進もうと考えたのか。」と尋ねたところ、彼女は「一度きりの人生だから誰かの笑顔や誰かの幸せのためにな

ることをしていきたい。」と仰った。スッとその答えが返ってきて本当に素晴らしいと思ったのだが、このように考える背景には、川邊さん自身の学生時代の原体験がある。中学高校の時に地域の中でマイプロジェクトの活動に参加し、自分が困った時には必ず助けてくれる大人の方が地域にいる、そのことに気づいたことが、今の活動の考え方のベースになっているとも語っており、本当に素晴らしいと思った。私が長く関わっている CS の理念として、子供達を学校の中だけではなく、地域の素晴らしい大人と多く出会わせてあげたいという考えがある。川邊さん自身も地域の中で大人との出会いを重ねて今の活動に至っている。地域の中での子供たちに対する大人のサポートが非常に大きなものであると改めて感じられたことが、研修会での大きな学びであった。

次に、国が社会教育士を増やそうとしているという話があった。私も3年前に社会教育主事の講習を受講し、社会教育士の称号をいただいている。今、身に着けているこの社会教育士のバッジを有志の方々と作り、文部科学省の担当課と色々打ち合わせを進めながら、間もなく試作品を販売することになっている。製作・販売についても、障がいのある方々が働く施設でバッジを作り、その方々に還元されるようなシステムを作り、皆様に広めていこうとしているので、気に留めていただけたらと思い紹介させていただいた。

最後に、先週、出席した全国女性連絡協議会についてである。徳島県の副会長として石倉委員も出席されておられた。そのブロック会議で各県の発表について乾社会教育主事が講評されたのだが、その時の話がとても良かった。SNS に関する話で、今の若者の状況等を資料にまとめられ、SNS ツールそれぞれの強みを生かした使い分け等について話していただいた。ぜひ、この場でも機会を作って、その話をレクチャーしていただければと思う。

馬場委員長

大人自身が SNS を使いこなせる人とまだまだという人がいる。SNS 活用の注意点など、大人として知っておくべきことなど勉強する必要があると思う。

事務局

今回、全国女性連絡協議会四国ブロックでお話させていただいた内容は、当課で実施している SeDaTuNa(せだつな)の事業の中で、参加生徒とともに学んだことがベースになっている。どういうふうになれば自分達の活動を効果的に SNS で発信できるのかを学ぶ講座を設けて、その講座の中で生徒と一緒に学ばせていただいた。その時、私が SNS を上手に活用するための大切なポイントだと感じたことをお伝えさせていただいた。講評というほどのものではなかったのですが、もっと勉強してしっかりお伝え出来るようにしたい。

馬場委員長

ぜひその機会を設けてお願いしたい。「うみのこてらす」の話で思い出した事例がある。10年以上前、佐賀県の大学生による不登校の子供達に対する活動についてである。その方は、不登校の子供達の親からの相談を受けて取組を始めたということだ。それまでは、子供に深く入り込んではいけないということが常識的に言われていた時代に、その人は徹底的に子供と向き合い、子供の思いを汲み取りながら、強要するわけではなく少しずつ子供たちの変化を引き出していった。不登校の子供たちが学校へ復帰する割合が 90%を超えていたのではなかったかと思う。その大学生も当初、教員を目指していたが、教員に

はならず、その活動を NPO として今も続けていると思う。他の大学生も巻き込みながら、学生が不登校の子供達と正面から徹底的に向き合っていたということ思い出した。誰にでも出来る事ではないが、非常に大事なことだと思う。もちろん、一人で出来ることは限られるので、ぜひ、たくさんの方を巻き込むことが必要だ。

先程の山口県の事例でも、高校生が挑戦したいと言ったことに、大人がストップをかけるのではなく、「ぜひ挑戦しなさい」と言って、実現に向けての方策を共に考え、地域の大人と一緒に伴走してくれる。こういう大人が周りにたくさんいるということが、高校生の私にとって非常に勉強になったと、発表の中で語られていた。

子供達の中にある「挑戦したい」「学びたい」という思いを実現していく中に、それを支える地域の大人達がたくさんいることが非常に大事だと思った。

婦人会での取組を地域に持ち帰り、どのように活かしているのかについて報告したいと思う。婦人会活動には3つの柱があり、1つ目は地域活動、2つ目は赤十字奉仕団活動、3つ目は複十字結核予防会。その中でも赤十字奉仕団として、私達は各地域で防災活動について取り組んでおり、新年早々に起こった能登半島地震の被災状況等を踏まえ、婦人会としてどのような取組が出来るのかを考えている。まだ県婦人会としての方針は固まっていないが、各地域の様々な繋がりを生かした活動をしていきたいと考えている。

私の出身である勝浦町では、オーバートークというトークイベントを YouTube で配信している。その中では婦人会の活動報告や、能登半島地震の支援チームとして派遣された県の方から被災地の状況を聞き、今後の地域での取組について話し合っている。婦人会としては、地域のリーダーとして、発災以降の避難所の開設について各地域でどのように取り組んでいくのかを検討している。特に学校が避難所になるケースに備えて、防災士の方や役場の方と共に避難所開設や運営、誰一人取り残さないための避難所の在り方を話し合ってきたと考えている。

また、いざという時に活かせる知識・スキルにするために、婦人会では学習会を実施している。勝浦町では日赤病院から提供いただいた防災鍋や、大型の鉄板を活用し炊き出し訓練を実施している。ハイゼックスという耐熱袋があるが、お米を炊いたり、デザートを作ったり、子供から介護の必要な高齢者にも食べていただける災害時にも提供可能なメニューを開発できればと考えている。

講演会を聞くことも多いが、今後は、被災された方の支援、色々なボランティア活動をされている方の話を聞く講演会を開催しようと考えている。それから日赤病院とも連携し、避難所での運営手順や配慮事項、環境衛生の改善点等についても学習の機会を増やしたいと考えている。

また、各家庭で防災について話す機会を積極的に設けるような仕組みを検討している。どこに避難をするのか、持って逃げる物は何かを家族の話し合いを通して学習する予定である。

他にも防災士によるロープワークや新聞紙スリッパの作り方の指導を受けたり、たくさん出ている防災グッズの中から自分や家族に必要な防災用品を選び、避難袋をどのように準備するかについて学習する予定である。

各学校では毎年避難訓練を行っているが、PTA や地域の婦人会、防災士の方との繋がりができるような訓練があれば良いのではないかと考えている。

馬場委員長

能登半島地震の状況を見ていると、東日本大震災の時もそうであったように、社会教育活動が盛んな地域ほど自治会的な活動が復興しやすくなっているように感じる。普段からの繋がりが深いからだと思うので、婦人会も地域の中心となり発災時は、復興に向けての活動ができるような自治組織のようなものの手伝いをしていただきたい。突発的に動けるわけではないので、災害対策は日頃の活動が非常に大事だと思う。そのような観点からも、いろいろな人と連携しながら学校も含めて進めていく必要があると思う。

伊藤委員

前回会議において、ICT 環境整備のことや地域と学校の連携協働に関する研究大会参加の報告、地域住民のニーズに添った生涯学習講座の充実という点をお話しさせていただいた。公民館の機能強化という点ではハード・ソフト両面の充実等に、今後しっかりと取り組んでいかなければならないところ。ICT 環境整備については、先ほど、防災の話題があったように、緊急時に役立つ設備という観点からも、行政と協議をしながら、どんどん進めていって欲しいと思う。また、学びの広がりという観点からも、公民館の来館者が気軽に利用できる ICT 環境の整備(利用のしやすさといった側面からの機能強化)について早急に検討していく必要があり、今後の重点課題だと思っている。

また、学校と地域の連携協働という点からも、CS の取組とタイアップし公民館が社会教育の拠点として、地域と学校を結ぶような活動ができればと思うとともに、このような視点を提言に結びつけていければと思っている。

地域住民のニーズに応えていかなければ、公民館活動に人は集まらない。前回会議でも述べたのだが、鴨島公民館で実施している講座には、泊委員始め様々なジャンルの方に講師として来ていただいている。幅広い学習ができると同時に幅広い世代が集まることも公民館の素晴らしさだと思っている。世代を超えて人々が一緒になり学びと交流が実現する環境をめざしていかなければいけない。今月23日の祝日に鴨島公民館の文化祭を開催した。3年前のコロナ禍の時には何もできない状態で、テレビ収録をしてケーブルテレビで放送するという味気ないもので終わった。去年は講座生の発表のみ、この時も無観客で味気ないものだった。今回は地域の人をしっかりと巻き込んでいかなければということで、地域で活動する太鼓の団体や子供のダンス発表、空手演武や舞踊の発表等、小さな子供達から高齢の方まで皆が一堂に会するようなプログラムを編成し、あらゆる世代の方々に発表に参加していただいた。子供の演技を見て元気になったと言って帰られた年配の方が大勢いる一方、年配の方が一生懸命に練習して三味線やオカリナを演奏する姿から生涯にわたり学び続けることの大切さを感じとった子供達もいたように思う。このような取組や環境が、今後も必要だと思っている。

また、春休み期間の3月24日には「子ども元気まつり」を開催する。その行事は子供中心になるが、婦人会や天寿会の方、各種団体や消防関係の方々にも参加いただき、一緒に祭を盛り上げていただく予定である。働く車の体験コーナーや昔の遊びコーナー、婦人会提供による飲食物ブース、また、全米チャンピオンとなった方のバルーンアートパフォーマンスの企画等、若い世代と高齢の方々の交流はもちろん、感動や新しい発見があるようなイベントを計画している。

地域住民のニーズに応じた企画、そして、そのニーズを早い段階で具体化し、住民の皆さんに提供していくことが非常に大事だ。加えて、一緒に活動する人や講師になっていただける方、公民館活動に協力していただける団体や協力者を増やしていくこと、そして、その方々をコーディネートするのが我々の役目ではないかと思っている。人と人を、団体と団体を、子供と大人を結び付けていくといったことができれば良いのではないかと、今、試行錯誤しながら取り組んでいる。

馬場委員長

非常に貴重な意見だと思う。公民館は社会教育のプラットフォームであり、多様な主体の連携協働の拠点であるべきだと思う。そのためには、いろいろなことを模索しながら、どのような活動を地域の方々が望んでいるのか、調査をしっかりと行っていただきたいと思う。

榎本委員

私は1月11日に石川県に支援物資を届けてきたので、その経緯や活動を通して考えたことを報告させていただく。日本ユニバーサルツーリズム推進ネットワークの四国支部に加盟しているので、そこから1月7日に物資の要請があった。日本ユニバーサルツーリズム推進ネットワークは、障がい者や高齢者等の支援の必要な方の支援に日頃から取り組んでおり、発災後の石川県で何が必要であるのかピンポイントで指示があった。正式要請であったので、徳島県の窓口として、2日間にわたり支援物資の提供について SNS で発信した。わずか2日間で、どれくらいの方が見て、行動してくれるのか自信がなかったが、2日間で3トントラックが満杯になるほどの支援物資が届いた。ピンポイントの指示のもと集まった支援物資は、すべて必要なものばかりであった。1月11日には、石川県に到着し現地の状況を把握してきたので、今回、学んだことを、今後起こるであろう南海トラフ地震に備えて動いていきたい。今回、金沢の日本ユニバーサルツーリズム推進ネットワークの代表の方の事例を紹介したい。この代表の方は、支援物資の2段階輸送を提案したのだが、理由の1つに、支援物資が学校や公民館に届けられても、発災直後には物資の仕分けをする人がいないということ、その地域ごとに必要なものが違うということ等が、現地で課題になっていることが背景にある。

石川への移動が制約されるメディア報道がある中、金沢は地震の影響が少なかったことから2段階輸送を提案した。金沢には支援物資の保管場所もあり、支援できる人もいる。地域の方々、警察・消防・自衛隊が連携し、各自自治体がここにはこの物資が必要、この地域には誰が避難しているという情報交換、支援体制が整えられた。一番ひどい被災地に食べ物が運ばれても、仕分ける人が



いないので食べられない。高齢者の多いところに赤ちゃんのオムツが届いたり、水もガスも出ないところにインスタントラーメンが届くといったことが現地で起きている。このような事態が起きないように2段階輸送をするのだということだった。大きな震災では行政は大きな舵取りをするので、日頃から地域で連携を取ることが大事である。私達、福祉に携わる者としては、日頃から事業所との連携で避難訓練を行っているが、大きな地震の際にはその避難所の建物が崩れて避難できないこともあり、避難訓練の想定が機能しないこともある。石川の地震でも、7か所のうち2か所しか避難所として機能しておらず、その避難所に行くはずであった人達が、車中避難していたり、倒壊しそうな家の中で過ごしていたり、という状況になっていた。この石川の事例を踏まえ、南海トラフ地震が起きた時の想定をすべきだと思う。地域の方々が連携して、このような状況の場合には家にいるとか、車に避難しているとか、地域の自治体に情報を共有し、自治体が避難状況を把握できれば、そこに必要な支援物資を届けられることを今回の取組から学んだので、徳島県でもこのような支援体制を作っていければと考えている。

また、2段階輸送の他にも「届け. JP (ドット ジェイ ピー)」というサイトをその方は作った。そのサイトにアクセスすると、「〇〇市に△△の物資が必要」といった詳細な情報が掲載されており、支援者は Amazon から支援物資を購入して Amazon から現地に届けるというシステムで人が介在しない仕組みになっている。混雑や混乱を避けるためにサイトが作られている。今回は障がい者の方に向けた「届け. JP」であるが、子供向けや妊婦向け、高齢者向けにサイトを分けることで、物資の不足や充足の状況を客観的に見ることができ、不要な物が届かなくなる。このようなサイトを今後、徳島県でも取り入れても良いのではないかと考えている。

公民館を含め、身近な社会教育施設が物資の受付や、仕分け場所として活用できれば、スピーディで小回りの効く支援が実現すると思う。例えば、公民館ごとに受け付ける物資を決めて、〇〇公民館に行けば、△△の物資があるというような仕組みを作っていけばよいのではないだろうか。

もう1つ、今後、取り組んでいきたいこととして、外出等が難しい障がい者の方も、コミュニケーションをとったり、働く選択肢を増やしていけたりする時代であるということ、出前授業で子供達に伝えていきたいという希望がある。私の運営するカフェに OriHime というロボットがいるが、OriHime を媒介にすれば、障がいのある方だけではなく、不登校の子供も一緒に修学旅行に参加できたり、自宅に居ながら皆と同じ時間を過ごすことができたりする。子供がそのような体験をとおして福祉を近くに感じてもらえるような取組を実施したいので、教育に携わっておられる皆様に広報させていただきたい。

馬場委員長

大きな災害が起きた時は道が寸断され、動けない状況の中でどう対処すべきかが緊急課題だと思う。ボランティアも入れない状況では仕分けが細かく出来ない、住民同士の繋がりが日頃からできていれば、刻々と変わる状況の中で、今、何が必要なのかという情報を発信しやすくなると思う。このようなシ

システムをいち早く立ち上げられる日頃からの付き合い、まさしく社会教育の繋がりが非常に大事だと思う。「OriHime はロボットではありません」と書いてあったのが印象的であった。多くの人が障がい者のこと、1人1人の障がいの違いを理解してくれると、もっとボーダーレスな社会になっていくと思うので、学校の方でも連携できる機会があれば、出前授業等を検討いただきたい。ぜひ協力をお願いしたい

岸本委員

1つ目は、前回の会議でCSの中身の充実について意見が出たようだが、本校でもそれが課題となっており、工夫の余地があると感じている。来年度に向けて、本校では地域の「ヒト・モノ・コト」を学びの素材として、地域学習を核としたカリキュラム開発を進めているところである。先般も全教職員で、地域の人材の状況や教材を付箋に書き出してカテゴリー分けをしたところである。テーマとして、小学3年生では「まちづくり」、4年生では「環境」、5年生では「食文化」、6年生では「防災」と決定された。新たな取組として来年度のカリキュラム開発にCSの委員の方々の意見も反映させたいと考えている。3月20日にCS会議があるので、作成途中ではあるが、私達職員が意見出した模造紙をそのまま提示して、その上に委員の方々にも地域人材や地域教材について付箋に書き出していただき、助言いただこうと考えている。計画の段階から提案や助言をいただくには、校長がリーダーシップを発揮していく必要があると思っている。少しずつではあるが、学校側からの取組を、お示しながら工夫を加えていきたいと思っている。

2つ目は、社会教育施設の積極的な活用も学校教育の中で大事なポイントになるとしている。本校は町立図書館が隣接されており、上履きのまま校舎と図書館を行き来できる恵まれた環境にあるので、学校図書館利用の日を設け、各学級月2回、業間休みに図書を10冊まで借りられるという取組をしている。また、学校サポーターズクラブの取組として、読み聞かせボランティアの方が毎週木曜日、朝の活動で読み聞かせをしてくださっている。また、町立博物館も近接しており、毎年6年生が文化財巡りを行い、古墳や古銭について学んだり、上学年が陶芸教室で焼き物製作をしたりしている。これまで伝統的に行われてきた教育活動であるが、更に工夫改善をすれば各学年で多様な活用の仕方があると思う。そこで学校では、校務分掌の中に社会教育担当というもの位置付けて、社会教育施設に関する情報共有や教員への提案ができるよう体制づくりを行うことも大切ではないかと考えている。

3つ目は、本町では海陽学校活性化協議会という組織があり、各小中学校の運営協議会の要としての役割を担い、放課後子ども教室や土曜学習等、子育てネットワークづくりを推進してくださっている。放課後子供教室の利用者は本校でも93名に上っており、活発に活動している。それから土曜学習では、磯の観察や星空観察、大里松原の植林等、他の団体とコラボレーションしつつ実施している。その中でも特徴的なものとして、海部高校の魅力化推進を進めているが、幼・小・中・高が連携し、縦の繋がりを大切にしながら地域の子供を地域全体で育てて、町全体で海部高校を応援している。この取組によ

り、ふるさとに誇りを持つ子供の育成になっているのではないかと考えている。学校は様々な活動を学校のホームページや学校通信等を通して紹介し、地域に少しでも還元できるように取り組んでいる。隣町の小学校でも、3年前から学校の施設を放課後子供教室の活動のため開放している。学校教員が指導に当たる訳ではなく、指導員の方が指導されるのだが、学校施設の放課後における有効活用事例となっている。

馬場委員長

まさしく社会に開かれた教育課程を実践されており、非常に素晴らしい。ぜひ県内のモデル的な活動として展開してほしい。話を聞き島根県のふるさと教育を思い出した。島根県は小・中・高でふるさと教育を取り入れており、地域を知るということを積極的に学校側から取り組み、成果を上げている。海陽の取組もモデル的で非常に素晴らしい。

児嶋委員

初めて社会教育委員に就任した折、私のベースは保育だから場違い感を持っていた。しかし、それは私の不勉強の致すところで社会教育は幅が広く、何にでも入り込める可能性を持つジャンルだと知り、非常に可能性を感じている。実際に、馬場委員長が仰っていたように福祉と教育の連携も具体的な形で広がってきていると思う。その中で保育所が少し違うところにあるのではないかという感じがしている。次世代育成や持続可能な社会の基になるのは保育所だと私は思っている。子供の世界も生まれた瞬間からどんどん分断が始まっている。習い事に行かせるか幼稚園に行かせるか、都会であればお受験をさせるか等、少ない子供がどんどん分かれて階層化され、同じ階層の人としか付き合わなくなり、人間関係もそこで完結してしまい、夢や希望が具体性のないものになるという非常に悲しい方に進みつつあると思う。その中で唯一まだ平等性が保たれているのが保育所やこども園ではないかと思っている。保育園やこども園は一部だが、ご存じの通り児童福祉施設は生活に困窮している世帯もあれば、両親ともに社会的地位や給与水準の高い世帯もあり、多様な家庭環境の子供達が唯一、一緒に過ごせるのが保育所で、障がいのある子供もどんどん受け入れている。その親もまだ若いからそこにチャンスがあるのではないかと思っている。だからこそ、保育所は非常に重要な仕事であるが、悲しいことに昨今、不適切保育という言葉が新聞を賑わしている。保育者についても、純粹無垢なまま現場に入り、どんどんキャリアを重ね、世界が閉じられているために、比較対象もなく良いモデルを見ることがもなくそこで完結してしまって、いつの間にか皆の感覚がズレてしまうところに問題があると思う。家庭で起きる虐待も同じではないだろうか。保育者も若く保護者も若い。そこに地域との繋がりを作っていかなければならないのではないか。保育者になる方は、大学や専門学校を卒業し、そのまま採用になる。その人の生きてきている社会も狭いと思うので、様々な経験をし、社会と繋がりが多様な人がいるということを知りうちに知って欲しいと思う。価値観を広げて、自分の身の回りで起きたことが全てではないと知って欲しい。その1つのきっかけになるのは、ボランティアであると思う。私は短期大学のボランティア講座の担当をしている。徳島県にボランティアパスポートの制度ができたのが平成28年ぐらい。ずっと続い

ているものの、短期大学部で受講する学生はコロナ禍でかなり落ち込み、今回単位取得した者はいない状況だった。学生の興味、関心を引くような仕掛けをしているのだが、なかなか成果につながっていない現状がある。今日は、各委員の話聞きながら、やはりチャンスは作っていかねばと思っているし、先ほど榎本委員から出前授業も可能と話があったので、こういう場を繋げていきたいと思っている。

また、SeDaTuNa（せだつな）高校生の活動も素晴らしいと思う。どんな子供達が参加しているのだろうと思ったら、学校のリーダー的な子供達を実施しているわけではないと伺った。普通の中・高生にこういう場を与えられるというのは、この人達の自己肯定感を高める上で非常に重要だと思った。ただ、そこに到達するまで、やってみようと思うためには、やはり乳幼児期が大事だと思う。今更だが、非認知能力を乳幼児期の早い時期に高めることが、その後の人生を意義あるものにする、或いは幸福な人生を送ることのベースになるということが以前から言われており、研究でも明らかにされている。しかし、その役割を家庭教育にあまり期待できなくなっているのかもしれない。パパママ講座等に出てくる方達は、ある意味意識が高い。私も大学の中で子育て支援イベントを年8回程実施しており、非常にたくさんの方に申し込んでいただいている。リピーターになってくださる熱心な方は何回でもそういうところに足を運んで、学生との交流も楽しんでくださっている。しかし、そうではない方々が問題で、どうすれば出てこられない方達に地域との繋がりを作っていけるのかということ、これからの子育て支援では考えていかなければいけないと思う。せっきく保育の仕事を選んでくれた人達が、専門的な勉強をするだけではなく、もっと広く世の中を知ってもらい仕掛け作りをしていきたいと考えている。

馬場委員長

幼いころから多様な考えを持っている子供を育てることが大事だが、残念ながら、学習機会の場に出てこない親達が悲惨な事件を起こしているという現実問題もある。国としても、なかなか出てこられない家庭に届けるアウトリーチ型の家庭教育支援の挑戦をしているのだが、そういったことも拒んでしまう様な親達がたくさんいることも事実。日頃からの付き合いで、少しのおせっかいが地域にあると広がっていくと思う。ぜひ、いろいろな仕掛けを続けてほしい。

小西委員

日々学生として生活する中で感じたことをお伝えしたい。まず、ICT 環境整備について、私は ICT 教育を学ぶ側であるが、小・中・高と私の世代では ICT 教育は一切されておらず、大学で初めて ICT 教育というものに出会った。実際に、その ICT 教育が学校を離れた時に役に立っているのかと考えた時、正直にな感想として、同学年の18～19才の人達はあまり活用できていないと感じる。例えば、授業で活用している ICT に特化したアプリがあるのだが、同学年の学生は「使ったことがある」という初歩的レベルに止まっており、そこから学びを深化させた状態とは言い難く、初めて活用する私とほぼ同時スタートという状況である。だからといって、その学生達が ICT について全く知識がない

かということ、例えば、スマートフォンの使い方や SNS 等の活用には長けている。ICT 教育と SNS の何が違うかということ、学生達に興味があるかどうかということが大きな違いだと思った。学生達は、興味があることにはとても主体的に学ぶ姿勢があると思いで、やはり ICT 教育についても、もっと学生達に興味をそそるような教材を活用していくことが大切だと感じている。

SNS 活用例として紹介すると、SNS で話題になっている店や場所を探して行くという学生が多い。だから、SNS を活用して、社会教育士の資格取得を推奨するような、今までとは違った広報の仕方をするのが良いと感じた。今の学生は就職活動に有効な資格を取得する人が非常に多いが、実際問題、社会教育主事という資格すら知らない学生がいるのが現状だ。だからこそ、まずは学生に知ってもらうということが非常に大切である。知らないということすら学生達は感じていないと思うので、知ってもらうということが一番大切だと思う。

9月に大学祭があったのだが、コロナ前と比べると規模が縮小されている。実行委員の学生に、規模縮小の理由を聞くと、やはり前例を知らないことが一番大きな要因になっているようだ。10年前の大学祭では他大学と連携したり、地元企業と連携したりすることが多かったが、これまでのノウハウが引き継がれていない今、そういう考えを導く存在が必要だと感じた。同様に、例えば社会教育の現場にも必要だと思った。

また、公民館で ICT 環境の設備を整えていくというのは、緊急時にも非常に役に立つと感じる。現在、昔ながらのアナログな公民館が多いと思うのだが、ICT 環境の整備を進めておけば、緊急時にも子供達の娯楽や学びにも活用できると思う。さらに、20代30代の子供のいない世代にとっては、公民館は身近ではない離れた存在になっているのではないか。20代30代の子供のいない世代にとっても馴染みのある来館しやすい公民館をめざすことが大切だと感じた。

馬場委員長

私が大学で教えている頃には、スマートフォンは使えるがパソコンはほとんど使えないという学生ばかりで、何でもスマートフォンで済ましてしまう状況であった。義務教育段階で SNS をフル活用するといったことを一気に進めるのは難しいが、今の子供達は自分で発見しながらクリエイティブに動いていると思うので、子供達と地域の大人達が ICT や SNS の活用について、どのように関わっていくのが今後の社会教育の課題だと思う。

公民館の ICT 化は、ほど遠いという状況が全国的にある。社会教育の予算が縮小し、古くなった公民館を新たに立て直す予算も取れない自治体が非常に多いと思う。廃校になった学校等施設には、多少 ICT 環境も残っているはずだから、それらを活用しつつ行える活動について、今後は試行錯誤しながらやっていく必要があると思う。先行きの見えない時代だからこそ、いかにクリエイティブに生きていくかということと、今の子供達が大人になる時に世界に負けない人材に育てていくためには、多様な経験をする必要があると思う。困難にぶち当たった時に乗り越えられる力を、小さい時からどう培っていくか。学校教育やそれを支える地域の力を向上させることが非常に大事だと話を聞いて

武市委員

て思った。

先週、NHK 徳島放送局で、不登校の子供達が通うフリースクールを4月に開設しようとしている佐那河内村の寺子屋の取組について放送させていただいた。我々ローカルテレビ局でもメディアを使い教育についてお伝えすることに力を入れている。加えて、職場体験という形で NHK の職場でアナウンサーになってみたり、カメラマンになってみたりする学習を徳島放送局では実施しているの、上手く徳島放送局を使っていただきたい。徳島県内の教育の部分を子供だけではなく大人の方々も、世代関係なく有効に NHK を活用してもらえようようにしていきたいと思っている。

今回は、全国の NHK について、お伝えしたい。唯一教育テレビ「E テレ」を持つ放送機関であり、コンテンツの6割は教育コンテンツを提供している。子供だけではなく、学び直し、リスキリングとして、大人向けのコンテンツも、どんどん増えている状況である。また、最近はテレビだけではなく、スマートフォンやインターネットで NHK プラスに入れば、追加料金無しで、いつでも見直すことができるというコンテンツもある。これらを活用し、好きな時間に好きな場所で、好きな仲間と見る。見ることで地域の交流にも還元していくことができるような仕組みを、我々、公共メディアでは作っていきたくて考えているので、ぜひ、使ってみていただければと思う。

そして徳島放送局でも教育について、もっと伝えていきたいというパッションを持っているので、皆様のご意見等をいただけたらと思う。

馬場委員長

私の関係する団体でも NHK の教育コンテンツにとっても注目している。たくさんさんの教育コンテンツを持っておられるので、もっと使われると良いと思う。NHK の教育コンテンツについて、知らない、知られていないというのが現状だと思うので、ぜひ徳島ならではの情報も増やしていただければありがたい。そうすると学校教育との連携もしやすくなると思う。

泊委員

1点目は、SeDaTuNa (せだつな) メンバーの応援者として気づいたことをお伝えしたい。クラウドファンディングの返礼で、会社(企業)がバリアフリーに対して、どの程度の適応ができているかをチェックしてもらったメニューがあったので、車いす体験をしながら調査を行った。私は車いすを利用したことがなかったので、会社入り口のスロープが急であったり、体温計スタンドが車いす利用者にとっては高い位置にいたり、トイレが入りにくかったりといった問題点を洗い出せた。当然ながら改修等には、コストがかかるのですぐにはできることと、できないことがある。近くの公衆トイレを案内するなどソフトに対応できる場所がないか、生徒達、Up to US Japan の西岡さんらとアイデアを出し合った。まず車いすで来社される方への対応として、前もって連絡をいただき、到着時には、車いすでの移動を支援するといった工夫等、お金をかけずともできることがあるということに気づくことができた、素晴らしいプロジェクトだと思う。可能であれば、もっと多くの企業に体験していただき、徳島の街自体がバリアフリーになれば良いと思った。また、西岡さんからは、車いすに乗る方がどういう支援を必要としているのかを聞いて欲しいという意

見が出された。例えば、車いす利用者の方がオペラ鑑賞をしたい時に、満員の会場だったり、バリアフリー整備が十分でない場合は諦めがちだけれども、動画配信であったり、本番前のゲネプロの様子を見ていただいたり、意見交換をしながら、障がいの有無にかかわらず共に楽しむ方法を見いだしていけるということを知り、実りが多かった。また、SeDaTuNa（せだつな）に参加する高校生が、私が応援し、出演もしているオペラを見に来て、「大の大人が頑張っている姿を見て感動した。自分も頑張ります。」とコメントしてくれて、とても嬉しく思った。SeDaTuNa（せだつな）は、何代も続いているので、こういう人達といつか仕事をしてみたいと思った。

また、オペラ繋がりと言うと、鴨島公民館との連携はとても進んでおり、去年「オペラを100倍楽しむ」というプロジェクトを実施した。今年は、地元の高校の吹奏楽を入れてみようかという話が出るなど、地域を盛り上げようという動きもあり素晴らしいと思っている。

2点目は、個人的に内町敬老理事会の委員長を務めているが、一番初めの会の時に、内町小学校の前身となる寺島尋常小学校の校歌を残したいと言われる方がいたので歌っていただいた。地域の中には、他にも、目を向け受け継がなければ無くなってしまうことがあると思うので、そういったことを繋いでいくことができれば良いと思った。また、クラウドファンディングを応援するにあたり、お社を復活させるという取組を高校生が成功させた事例もある。諦めてしまわずに、これが無くなったら困るという問題に子供達が目を向け挑戦しているということが、素晴らしいと思った。

馬場委員長

クラウドファンディングは最近、色々注目を集めているが、そんなに簡単にはいかない部分もあるので、一概には言えないが、今の高校生の発想は素晴らしい。大人が考えないようなことを発想するので、そういうところに興味を持ってくれる企業もあれば、大人達もいらっしやると思うので、そういった繋がりを広げていくことについても、今後の教育として考えていかなければいけないと思った。

横田委員

学校現場におりますと、日々の教育活動にどうしてもいっぱいになってしまいがちになる。こうした会に来させていただくと、自分の中でも見失いがちになっていることを色々と思い出し、委員さんのお話を聞く中で気づきを沢山いただいた。地域と学校の繋がりについては、提言の中にもたくさん入ってきており、核となる部分ではないかと思うが、学校現場の一員としては、やはり教育現場で夢を語りたくて常に思っている。

私自身の理想は、それぞれの子供達がやりたいことを自分たちで考えて、行動できる環境を作り、支えてあげたいと考えている。支える部分には、ICT やものづくりの材料、人的支援も含まれる。社会教育の分野、地域の優れた人材に生徒達に寄り添っていただき、助言等の力を貸していただきたいと思っている。それが上手くいくと、学校の教員の力を借りずとも自分達でそうした地域のグループ、例えば、自分で放課後に公民館へ行き、NPOさんのところに一緒に入っていく活動ができたとしたら、それは素晴らしいことだと思う。

ただ、そこまで主体的に活動するのは、なかなかというところがあると思うが、実はその気づきを、本校の生徒からもらったことがある。1人の生徒の例を紹介すると、高校生ユーチューバーとして本校生徒を徳島新聞に取り上げていただいた。その生徒は、徳島県をどうやって活性化するかについて、一生懸命に考えており、県庁に入り、将来は県知事になるという夢を持っている。生徒の制作した動画を見ると、本当に素晴らしく四国に新幹線を誘致しようといったことや徳島県内にはこんなに素晴らしいところがあるということを紹介する動画を上手に作っている。その生徒は、大きな賞も受賞しているが、教員は少しも関わっていない。幼い頃から公共交通機関や汽車が好きで、一生懸命に県内をかけずり回り、自分で動画を作ってきている。かなりの配信数とフォロワー数を持っており、結構なインフルエンサーである。このように自分の好きを突き詰めて、夢の実現に至る子供もいるが、やはり生徒が1人1人のキャリアを積み上げていくことができる環境作りを、保育園・幼稚園・小学校・中学校・高校・大学と、各発達段階における体験をキャリアとして積み上げていくことに、学校や地域が関わり、子供達を皆で育てるということが理想だと思っている。学校で出来る事としては、子供達のやりたいと思う気持ちを大切に、1人1人が好きを突き詰めていくことのできる活動に舵を切れるよう、総合的探求の時間の課題設定を行おうとしている。

本校では小学6年生で受験をして入学し、6年間を同じ人間関係の中で過ごしていくことになるので、自分を認めることができず、なかなかしんどい思いを抱えてしまう子供もいる。もう少し広い視点で見ることができれば、どんなに楽になるかと思える子供もいる。そして、親御さんも疲弊しているケースもあるので、地域の中に親御さんや子供の居場所を求めることができないかと皆様の知恵をお借りしながら考えていきたいと思っている。

馬場委員長

階層化されているという話しは、なかなか難しいところである。私の知人が横浜のみなとみらい地区の超高層マンションに住んでおり、そこの子供達の付き合いが本当に限られており、大人になったらどうなるのだろうと思う。意図的に誰かが、きっかけを作っていかなければいけない。まずは行政が手を差し伸べるところから始めて、もう少し付き合いの幅を広げていくことができるよう、子供のうちから遊べる環境を意図的に作る事が大事。横田委員には、今後とも新しいアイデアにトライしていただけたらと思う。

横島委員

自給自足の生活をしている子供が本校に在籍している。給食は食わず弁当を持参している。とても自由活発な子と接しながら本校の生徒達は育っている。

本校の学校経営の理念にも通じるのだが、主体的に自分達が考え、自分でチョイスする時代が変わってきているように思う。その時代を生き抜くには、ある程度取捨選択する力が必要。それから行動力や判断力も必要。その力をつけるには体験が必要ということから、学校では、忙しいほどの様々な体験活動をたくさん実施した。その実現に必要なのがCSの委員の皆様を中心とした地域の方のネットワークだと非常に強く思っている。

先日、学校運営協議会を開き、次年度の本校の部活動についてアンケート等



で様々な意見をいただき、これまで、休止していた文化部活動の復活について協議した。音楽、美術、書道、茶道、写真等の文化を中心とした総合的なクリエイティブ部を作りたいという構想を提案すると、写真の支援は公民館でも実施しているので人材を確保し、書道は書道教室の先生が近くにいるので協力を依頼するというありがたい言葉をたくさんいただいた。

本校は小さな学校なので、教員の人数も限られている。教員が全てを担えるとはとても思っていないので、初めから外部の方に御協力をいただき、地域の様々な方から学ぶということが、やはり子供達の知恵になり生きていく力になると、1年間を通して、私自身が経験させていただいたので、次年度、実際に取り組んでみたいと思っている。また、先日、部活動の地域移行推進協議会が美馬市であり、私も委員として参加してきた。県の方にも委員として参加させていただいているが、なかなか難しい課題がある。美馬市のクラブチームの本部長が次世代に活躍してほしいということで、指導者100人以上に声をかけたようだが、全て断られたらしい。その理由は、責任の所在について、トラブル時やけがをした時に、どう責任を取るのかというところで、力はあるし、やる気もあるが、二の足を踏むケースが多いと聞いている。私も、次年度の部活動指導員として指導してもらいたい部活動があったので声を掛けた。もちろん、市の教育委員会にも掛け合ったが、なかなか難しく、自分でも色々手を打ってみたが、見事に全員に断られた。部活動で活躍している方は、市役所や消防署にいますので、これは兼職兼業も認めていただかないと、これから先に絶対に行き詰まることになるかと痛感した。人材確保の足かせになっているものは、どこかの段階で取り払わないと、今の子供達がいろいろなことを学ぶ機会を本当に奪っている。地域が一番分かっているのに、学校の中だけだと本当に小さい経験にとまってしまう。今の学校は、地域の協力無くしては成り立たない。子供が少なくなり必然的に先生も少なくなり、教えることが限られたものになる場合は、やはり地域の人材と連携することが絶対に必要だと思う。部活動の地域移行問題は地域の力を借りないと進んでいけないと思う。

馬場委員長

非常に大事な視点だと思う。公務員は、できる理由を考えずできない理由を探しがち。前に進まないことがありがちだが、これからは次世代を切り拓いて持続可能な社会を作っていかなければいけない。

どうしたら良いのか、どうすれば実現できるのかを考える子供を育てていきたいと思う。先程の山口県の話だが、マーケティングに興味がある女子高生の例を紹介する。山口県の場合は、総合的な探求の時間の単位をもらえるので、イベントを企画するとその何%かが還元されるという、世の中のお金を動かす仕組みを研究し発表しており、これはよい視点だと思った。GDPがドイツに負けてしまった時代に、今後経済を動かしていく人材がぜひ必要だとつくづく考えており、彼女のように、そういうことに興味を持つ子供に色んな人がアドバイスをしてくれるので、非常に伸びしろがある話だと思いながら聞いた。教育では、お金儲けはいけないことだと、できない理由を探しがちだが、どこまでできるのかを考えていく時代がきている。そうしなければ、世界に出て戦え

る人材は育たないと思うので、興味のあるところをどう伸ばしていくのかを、  
今後は教育分野でも考えていく必要があると思う。

では、以上で本日の協議を終了とする。